

## 1 研究主題・研究副主題について

研究主題 「主体的・対話的で深い学びに向かう授業づくり」

研究副主題 「主体性を育む効果的な『問い』に着目して」

## 2 主題設定の理由

Society5.0時代の到来、新型コロナウイルスの流行、未曾有の自然災害など、現代は予測が困難な時代と形容される。そのような中、我々教師には、自分のよさや可能性を生かし、多様な他者と協働しながら持続可能で豊かな未来社会を創り出すために必要な資質・能力をすべての子供に身に付けさせることが求められている。

一方、社会科では、「学習指導要領解説社会科編」（平成29年告示）において、主体的に社会の形成に参画しようとする態度や資料から読み取った情報を基にして社会的事象の特色や意味などについて比較したり関連付けたり多面的・多角的に考察したりして表現する力の育成が不十分であるとの指摘がなされており、今後は、児童生徒の主体性を育む効果的な問いにより、社会との関わりを意識しながら課題を追究する活動を一層充実し、知識や思考力等を基盤として社会の在り方や人間としての生き方について選択・判断する力等の育成が求められている。

そこで、時代の変化を前向きに捉え、自己や他者との対話を通じて課題の解決を図るとともに、自分と社会との関わりを考えながら持続可能な未来社会の実現へ向けた新たな価値を創造する学びこそ、我々が目指すべき令和型の社会科の学びであると捉え、研究主題を「主体的・対話的で深い学びに向かう授業づくり」とした。また、研究副主題においては、「問い」を切り口に、児童生徒の主体性の育成を目指し、「主体性を育む効果的な『問い』に着目して」とした。

## 3 研究内容

社会科における問いについて大妻女子大学教授 澤井 陽介氏は、『問いの質』が深まるとは、見えるもの（見て分かること）から見えないもの（考えるべきこと）へと問いの対象が変わっていくことや、立場が時間を越えて視野が広がっていくことなどを表すと述べている。その上で、①写真や資料から事実や様子などを捉えさせる「事実を把握させる」ための問い、②事実をつなげたり、関係性を捉えさせたりする「特色や意味を考える」ための問い ③今後の社会の在り方や社会との関わり方を問う「これからのことを考える」ための問いなど、問いの目的と方法を考えながら授業を構成することの重要性を述べている。

そこで我々は、校種の違いや児童生徒の実態を踏まえた上で、問いの目的と方法を授業内容に即して工夫したり、資料を効果的に活用させたりしながら、課題解決に役立てるとともに、自己の考えの構築に生かす児童生徒の育成を目指し、次の4点について実践することとした。

### (1) 単元を貫く問い（学習課題）を設定した単元構想と発問の工夫

- ・ 単元のまとまりの中で学習した内容を総動員し解決を図る問いを「単元を貫く問い（学習課題）」とし、毎時間の学習を「単元を貫く問い」と関連付け、児童生徒の学習の動機付けを促すとともに主体的に学ぶ態度を養う。また、「問いの質」を意識した発問で、児童生徒の思考力・判断力・表現力等を鍛える。

### (2) 社会的な見方・考え方を働かせながら資料を読み取り、課題解決に生かす学習活動の設定

- ・ 課題追究・探究の過程において、分野ごとに整理されている「社会的な見方・考え方」を働かせながら資料を読み取らせることで、社会への関わり方を選択・判断したり、社会の発展のために多角的に考えたりできる資質・能力を育成する。

### (3) 学習内容の整理と把握のための「単元ワークシート」の活用

- ・ 自力で学習内容を整理できる児童生徒の育成を目指し、ねらいや発達段階に応じた「単元ワークシート」を活用した学びを展開する。枠内に自分自身で学習内容をまとめたり、級友の意見との共通点や相違点などを書き込めたりするスペースを設け、学習内容のつながりや事象等の関わりが分かるような構成とし、思考の可視化や課題追究・探究の過程を把握しやすくすることで、学習の見通しを立てたり、学習を調整したりしやすくし、学習の深化を目指す。

### (4) 児童生徒の到達目標（なりたい姿）「ルーブリック」の作成・提示

- ・ 児童生徒と教師との目標の共有化を目的とし、発達段階を考慮した方法により目指すべき姿や身につけるべき資質・能力を視覚的に捉えやすくし、見通しや振り返りの際の指標とする。「初級」「中級」「上級」や「S」「A」「B」「C」等の各段階の評価規準を教師が示したり、児童生徒と共に設定したりするなどして到達目標を明らかにすることで、学習意欲を喚起し、児童生徒が授業の主体となるようにする。

## 4 研究の実際

### ◆小学校◆

1年目は、研究内容をまんべんなく網羅することを目指したが、児童にとっては難しい概念も多く、小学校段階においては児童や各校の実態に即した研究内容の精選の必要性を感じた。そこで2年目からは、次の2点に着目し、授業実践を重ねることとした。

- (1) 単元を貫く問い（学習課題）を設定した単元構想と発問の工夫  
わくわくしたり、思わず解き明かしたくなるような学習課題の設定を目指し、児童の学びの筋道を想定したり、学習内容の関連性を考慮したりした単元構想に取り組んだ。
- (2) 社会的な見方・考え方を働かせながら資料を読み取り、課題解決に生かす学習活動の設定  
資料開発（発掘）、児童に提示する順番、提示方法など、児童の学習意欲や探究心を喚起する資料準備に加え、資料の読み取らせ方や活用の仕方の指導を両輪として情報活用能力の育成を目指した。

### ◆中学校◆

1年目より、小学校との滑らかな接続や学習内容の深化へ向け、実生活と社会的事象との関連を重視することが重要と考え、研究内容の中で特に次の2点に注力しながら授業実践を行った。

- (3) 学習内容の整理と把握のための「単元ワークシート」の活用  
自ら学習内容を整理できる生徒の育成を目指し、追究・探究の過程を可視化し、学習過程で生まれた新たな問いや多面的・多角的に自らの主張を構築できるようなワークシートを開発した。
- (4) 生徒の到達目標（なりたい姿）「ルーブリック」の作成・提示  
生徒と到達目標の共有を目的とし、単元の導入や途中、まとめの場面において、見通しや振り返りの指標となるよう、A・B・Cの規準や内容・表現、提示の仕方などを模索した。

※ 実際の授業の様子は、以下のリンクよりご覧ください。

・ 小学校第5学年 単元「水産業のさかんな地域」

(授業者 佐世保市立清水小学校 教諭 森澤 佑二)

リンク先→



・ 中学校第1学年 単元「アジア州～アジア州の特性が光る工場立地場所を提案しよう～」

(授業者 佐世保市立早岐中学校 教諭 井上 博数)

リンク先→



※その他の資料やルーブリックは、スマート・スクール・SASEBO 羅針盤をご参照ください。

## 5 成果と課題

2か年間の研究調査により見えてきた主な成果と課題は、次のとおりである。

### 【成果】

- ・ 単元の導入場面で、資料をもとに知りたいことや疑問を出させたり、社会的事象に対する課題意識をもたせたりする活動から、単元を貫く問い（学習課題）を立てさせることで、「主体的に学習に取り組む態度」を育成することができた。
- ・ 児童生徒が自らの学習過程や進捗状況を把握し、学習と振り返りを往還し、「何ができるようになったか」を実感できるような単元を開発することができた。
- ・ 資料の精選や提示の仕方・タイミングの工夫を行ったり、児童生徒の考えを図や表などを用いて可視化したりすることが、社会的な見方・考え方を働かせる手立てとして重要であることを認識することができた。

### 【課題】

- ・ 社会的事象の意味、価値を考えさせる学習問題との出会わせ方や単元を貫く問いの練り上げ方（妥当性や質の向上）、パフォーマンス課題の在り方については、分野の系統性や児童生徒の発達段階を考慮した多様な手立ての検討が必要である。
- ・ 児童生徒の主体的な学びを引き出していくためには、授業者の問いの質を高めると共に、社会的事象に対する学習者自身の「問う力」を高める指導が有効であり、効果的な指導方法についてさらなる検討が必要である。

### 《主な参考文献》

- ・ 澤井陽介『図解 授業づくりの設計図』（東洋館出版社、2020）
- ・ 澤井陽介、加藤寿朗『見方・考え方〔社会科編〕「見方・考え方」を働かせる真の授業の姿とは？』（東洋館出版社、2017）
- ・ 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説』（東洋館出版社、2016）
- ・ 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説』（東洋館出版社、2016）
- ・ 三藤あさみ、西岡加名恵『パフォーマンス課題にどう取り組むか—中学校社会科のカリキュラムと授業づくり—』（日本標準、2010）
- ・ 堀哲夫『新訂 一枚ポートフォリオ評価 OPPA 一枚の用紙の可能性』（東洋館出版社、2019）